

平河町ライブラリー 利用者像



弥永 幸子 氏
[いやなが さちこ]
E-FOUR株式会社
海外事業部 執行役員

立教女学院短期大学卒業後、NYにて音楽レーベルプロデューサーのアシスタントを務める。その後、株式会社ブイシムにて経営企画室海外担当。NY、パリ、ロンドン、における事業所の立ち上げプロジェクト、海外顧客及びパートナーとの窓口を担当。再度NYへ留学をし、帰国後ベリングポイント株式会社のプロジェクトアシスタントを行う。2004年E-FOUR株式会社へ入社。

意外なものとの「出逢い」や「つながり」が発展する場

「ライブラリーで仕事をしていると、知人が気軽に立ち寄ってくれます」

環境関連企業で、海外事業部の執行役員をしています。拠点はさいたま市にありますが、毎日行く必要はなく、プロジェクトの進捗に応じて世界の各地に出張することもあれば、海外のお客様に日本に来て頂くこともあります。六本木ライブラリーはお客様に会ったり、一人で仕事をするのに使っています。

ここは会社ではないので、知人が「ちょっと近くまで来たから」と立ち寄ってくれることがあるのが嬉しいですね。そんな気軽な訪問から話が発展して仕事に繋がることもあるので、とても重宝しています。

また、ブラジルでのプロジェクトをやっていた際、メンバーの紹介をきっかけに、現在会社でブラジル担当を勤めるポルトガル人と出会うことができました。メンバーの一人がやっている事業を、私のビジネスパートナーが興味を持って、そこから発展したこともあります。そんな六本木ライブラリーで起こる”意外なものとの出逢い”は、いつもとても面白いです。

アカデミーヒルズ六本木ライブラリーを拠点に、現在も活発に活動されている方、六本木は「卒業」されて、別の場所で新たなスタートをきられた方、それぞれ立場の違う6名の方に仕事に対する向き合い方、「ライブラリー」を使う理由、活用法を伺いました。

この6名の方は、平河町ライブラリーもご利用いただき、メンバーの「核」となっていただく予定です。

メンバーに対するご取材も可能です。
お問い合わせ下さい。

森ビル株式会社
アカデミーヒルズ事業部
マーケティングコミュニケーション
深町 友子

TEL: **03-6406-6649**

FAX: **03-6406-9350**

MAIL: fukamachi@mori.co.jp

URL: www.academyhills.com



青木 高夫 氏
[あおき たかお]
本田技研工業(株)

本田技研工業(株)で、大洋州中近東・アフリカ・北欧等の販社開発や販売を担当しつつたほか、海外駐在期間を通じ、海外のマネジメント及びメーカーと小売業のパワーバランスに関する研究を行う。現在、同社の渉外部門にて、日本の通商政策などを通じた政・官・財各界との対応を管轄。

マネジメントに必要な「先」を見据えるために考える場

日本のオフィスに「考える場」はあるのだろうか。集中して考えるには環境を変える必要がある。 渉外部長として部下を抱えるマネージャーをしています。最近はライブラリーに午前中にいき、部門の戦略や方針を作る「考え仕事」に充てています。

かつて本田宗一郎の経営参謀、藤沢武夫は「経営者とは、一歩先を照らし、二歩先を語り、三歩先を見つめるものだ」という言葉を残しています。トップに近づくほど、「先を考えなくてはいけない」はずなのですが、今のオフィスでは、メール、部下の報告、会議、電話などで30分考える時間をとるのも至難の業です。日本のオフィスに、「考えるための場所」ってあるのかな。考える為には、自分で働く環境を変える必要があると思って利用しています。

同様に、いつでも会社の情報にアクセスできる状態も、公私の区別がなくなってよくないですね。最近は「仕事を家に持ち帰る」代わりに六本木ライブラリーで片付けて、うちでは思いきりリラックスすることにしました。区切りをつけることで生活にメリハリができていいですね。

自分を集中させて仕事に向き合う為の場

同じ仕事をするのでも、解放的な空間とワンルームマンションでは、全然違います。

今年の4月から、北海道に住み、東京には3週間に一度、3日位の日程で定期的に来ています。その際には横浜の実家に泊まるのですが、基本的に家では集中して仕事はできないんですよね。でもここなら研究室と同じように自分を集中させることができる。本当は、オフィスを借りるべきなのですが、借りたところで、狭い個室やワンルームマンション程度。やっぱり天井が高い解放的な空間で仕事をするのは、いかに気持ちよく仕事できるかという点で全然違うと思います。

会社に属していれば常に外から刺激があるというのが普通でしょう。しかし個人で仕事を始めると自分を陳腐化させないための努力が欠かせません。常に斬新で新鮮な存在であれば他者からのニーズがあるのですが、誰からも求められないと、自分の価値は下がってしまいます。その点、ここは人との交流やつながりで常に新しい刺激や発見があるのが魅力です。



保田 隆明 氏
[ほくだ たかあき]
小樽医科大学ビジネススクール 准教授

早稲田大学大学院ファイナンス研究科修了。リーマン・ブラザーズ証券、UBS証券にてM&A、資金調達を担当。SNS会社の起業・事業譲渡、VCファンドの組成・運営、財務コンサルタント等を経て現職。著書に「企業ファイナンス入門講座」、「投資銀行青春白書」(ダイヤモンド社)などがあり、経済・金融の柔らかい解説が特徴。



小暮 真久 氏
[こくれ まさひさ]
「TABLE FOR TWO」理事代表

マッキンゼー・アンド・カンパニーを経て、先進国の肥満と開発途上国の飢餓の同時解決を目指す「TABLE FOR TWO」に参画。社会起業家として、日本企業の社員食堂から世界の子どものための飯の解決に取り組む。

一生をかけてやりたい仕事を「孵化」させる場

「考える目的の人」の集積により、アイデアが浮かぶ「空気感」があるのが魅力

Table for twoを立ち上げる前、自分が一生かけて本当にしたい事を真剣に考えたい時期に入会しました。集中する作業のときはワークデスクを利用し、ちょっとだけだれかに聞きたい、仲間と話して頭の整理をしたいというときはカフェ行き、考えに詰まると館内を散歩して、目に入る書籍から新しい刺激を受けたりしていました。階を移動しなくても、スペースで区切って照明も変えて、メリハリがある空間作りをしているのは、すごくうれしいですね。

六本木ライブラリーは、仕事が変わっても「考えたい人」が来ているので、行動や動線が同質の人が集まっている感じがします。お互い口を利かなくても何か感じ合え、アイデアが浮かぶ空気感がありました。この空気感は、来る人の性質や目的がまちまちな公共の図書館や街中のカフェでは得られないまさに「ここだけ」のものだと思います。



林 信行 氏
[はやし のぶゆき]
ITジャーナリスト、コンサルタント

アップル社やグーグル社の最新製品や企業動向の分析をはじめ、ブロードバンド化やブログ、SNSといったトレンドにも精通。最近ではグローバル化への対応を迫られる日本企業に、シリコンバレーの起業家の考え方やノウハウを伝えることがミッションのひとつ。

様々な本、人の気配、美術館…視野を広げるための「刺激」を受ける場

ここに来ると常にポジティブな気持ちで仕事に取り組みるのが魅力ですね。

ライブラリーは高いモチベーションや志で臨んでいる仕事をする時に利用しています。自分の殻に閉じこもるのではなく、窓から見渡せる東京の景色や日々、入荷する新しい本、そして周囲見渡す限りのモチベーションの高い人々、そうしたものの刺激を受け、視野を狭めずに臨みたい、そんな仕事のスタイルに向いている気がします。人の感情部分はなかなかコントロールできませんが、ここに来ると常にポジティブな気持ちで仕事に取り組みるのが魅力ですね。

六本木ヒルズは街の中に、美術館のような刺激を受ける施設があるのも楽しいです。視界の中のちょっとした変化やインスピレーションをくれるものは大切で、たくさんあったほうがいい。例えば、アート本に囲まれる40階のカフェで打ち合わせをすると、行き詰ったときに本のページをパラパラめくっているだけで「こういうやり方もあるのか」といった具合に、新しい視点や気づきなどを得られることもあり、本との偶然の出会いから得るものはとても多いですね。



松山 真之助 氏
[まつやま しんのすけ]
ジェイカレッジ校長
金沢工業大学大学院客員教授

名古屋大学工学部大学院修了。日本を代表する大手企業に勤務しながら、早朝通勤の時間を利用してビジネス書の書評メールマガジン「We book of the Day」を発行してきた。また、ジェイカレッジの校長として「気づきと学びの場」を創出。金沢工業大学で客員教授、東京農大では非常勤講師として、企業戦略特化論や社会事業マネジメント分野を教える。

発想やアイデアの交換を通じて人とつながる「秘密基地」

アイデアを交換できる「ガチャガチャ」マシンが欲しいんです。

現在フリーランスで執筆活動やメルマガ発行、講演活動をしています。

もし自分で事務所をつくったらやりたいことがあって、くだらない発想やアイデアを交換できる「ガチャガチャマシン」が欲しいんです。みんなでアイデアを入れた機械を会議の合間なんかにかガチャガチャ回すと、ヒントが得られたり、アイデアを通じて人とつながったりする。そんな風に遊び感覚でアイデアの交換ができるといいと思うんです。ライブラリーはそんなことが実現できるのではないかと考える場です。

同じように、「この本が、人生を変えた」という本を、一人3冊というルールで置いて、他者が閲覧できる書棚も面白いと思います。推薦者が読む過程で、折ったり、線を引いた軌跡が残った本が見られる上、たまたま手にした人が「私も感激した」と推薦者に伝えられるような仕組み、いっそ本に書き込んでしまってもいい。そんな風に人とつながるきっかけが、たくさんある場になるといいと思います。